

チョンジャマのテキスト

島山 篤

はじめに

シヌグ祭の恋歌 沖縄県伊平屋島の田名と我喜屋では旧暦七月にシヌグ祭（以下シヌグと略称する）を執り行う。この祭りの終わりごろに男神人（男の司祭者）や村人（男）が、女神人（女の司祭者）たちの籠もる（あるいはいる）アサギ庭から男神人たちの籠もるシヌグ庭へ行く道中、チョンジャマという歌謡をうたう。この歌謡の名称は、チョンジャマという囃子詞によっている。チョンジャマの語義は不明である。チョンジャマはチョンジャマー、トゥンジャマ、トンザマともいい、歌う場から道歌ともいう。

その内容は、暗れ着を着た若者が千鳥の鳴く夜の涙で娘と密会する、というものである。

このようなあり方をするチョンジャマは、今のところ田名と我喜屋には見られない。

麁曲 武藤美也子（一九八七、三〇八頁）によると、田名の一九八

四年（昭和五九）の祭りではすべての神歌（三曲）が田名屋（神屋）で録音テープを流して終わったという。神歌の三曲とは、サーシウムイ（勸酒歌で、おもろとも）、大城クエーナ、チョンジャマである。その前年に筆者が調査した時も、既にチョンジャマの前に歌う二曲がテープで流されていた。

諸見清吉（一九八一、三三七頁）によると、我喜屋の場合は一九五五年前後から祭りが廃れ、このチョンジャマを歌える人がいなくなつたという。筆者が一九九九年に聞き取りした時、男神人や班長（男）たちがこの歌謡を夜の道中でうたったのを耳にしたという老女を数名知りえた。

両村落のチョンジャマは、麁曲になつているのである。

本論のねらい チョンジャマは田名で五例、我喜屋で四例が採録されている。本論では、この両村落のテキストを叙事的な展開にそつて段落区分をし、比較・検討しながら、両歌謡の特徴を浮き彫りにする。また、本文の一部に混乱がみられるので、これを解消して本文を確定する。

1 田名のテキスト

田名のテキスト まず、田名の標準的なテキストとして、(1)『沖縄諸島の神歌』(一九七六)に採録されている「ちよんじやまー」を上げる。このテキストは、共通語訳が付されて外間守善・玉城政美(一九八〇a、三二四・三二五頁)に再録されているので、引用する。

A・Bなどの段落区分は、内容上から筆者が付した。

ちよんじやまー(伊平屋村田名)

A一 田名のひやーがいぢち思子 田名の比屋の意地気思い子

二 田名の子がいぢち思子 田名の子の意地気思い子

B三 あたい芋ぬ中ぐ 辺り芋の中子

四 引ち晒し晒し 引き晒し晒し

五 あたい芋ぬ中ぐ 辺り芋の中子

六 引ち出ぢやし出ぢやし 引き出し出し

七 七ゆみとはてん 七誦と二十誦

八 七ゆ柿掛きてい 七尋の総を掛けて

九 吾父がわた衣 我が父の綿衣

一〇 吾兄がわた衣 我が兄の綿衣

C 一二十日潮のならば 二十日潮になったら

一二 夜中潮のならば 夜中潮になったら

一三 白浜に降りてい 白浜に降りて

一四 大浜に降りてい 大浜に降りて

一五 石貝ゆ取いが 石な子を取りに

一六 あさら取いなちき あさら(貝)を取るふりして

一七 浜づきぬ下於てい 浜づきの下で

一八 星影ん敷ちやい ふしかぢも敷いて

一九 うすらうすら うすらうすら

二〇 寝なしするうちに 寝ようとするうちに

二一 足音ぬあゆん 足音がある

二二 足音ぬあゆん 足音がある

二三 吾父るやゆる 我が父である

二四 吾兄どうやゆる 我が兄である

二五 吾父やあらん 我が父ではない

二六 吾兄やあらん 我が兄ではない

二七 飛び鳥るやゆる 飛び鳥である

二八 浜千鳥るやゆる 浜千鳥である

二九 吾父が叫ゆん 我が父が呼ぶ

三〇 吾兄が叫ゆん 我が兄が呼ぶ

三一 いや父が叫らば おまえの父親が呼んだら

三二 いや兄が叫らば おまえの兄者が呼んだら

三三 あんしる返答すんどい そういつて返答するんだよ

三四 かんしる返答すんどい こういつて返答するんだよ

三五 朝が汐ん満たち 朝の潮も満たして

三六 夜中汐ん満たち 夜中潮も満たして

三七 うり迄語らな それまで語ろうよ

段落構成 主人公の登場するのが一・二である。男神人の最高位にあるのが田名の比屋(ヒヤ)(ダナンサーと同じ)で、その元気のいい愛息が主人公である。この段をAとする。

三―一〇は部分的ながら芭蕉衣の紡織過程(綿衣を付加している)を述べ、立派に作り上げた父(兄)の晴れ着を呈示している。若者はこの大人の晴れ着を着て一人前を気取り、逢い引きに出かけたのである。この段をBとする。

一一―三七は逢い引きの場面である。二十日潮の干潮のころ、貝取りを口実にして若者と娘が密会し、共寝しようとする(二〇まで場面描写)、若者は音がする、父や兄の近寄る足音だといってあわてるが、娘はあれは浜千鳥の飛ぶ音だから心配しなくてよい、父や兄が呼んだら貝取りにきたと答えなさい、さあ、満ち潮になるまで語り合おう、と述べる(三七まで問答体)。この段をCとする。

なお、一八の「星影ふしかぢ」は「ふしかぎん」ともいい、未詳語である。「沖繩古語大辞典」(一九九五、五七九頁)は「ふしかぎん」の項目でチョンジャマを用例に上げ、「未詳語」。「ふしかぎぬ」(ふしか衣)で、衣裳の名か。あるいは用例の宛漢字のとおり(星影)であろうか。」と記している。

その他のテキスト その他、(2)『伊平屋嶋テルク口』(一八九九)に、「チョヒシヤマブシ」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城(一九八〇a、三九〇頁)に再録されている。これは(1)とあまり変わらない。

これには「但田名屋のあしやげよりしのぐもりまでの道行ぶし」と

いう注がある。これは場の説明で、この歌謡をアサギからシヌグ野までの道行きでうたうということである。

(3)一九二七年(昭和二)に調査した宮城真治(一九九五、九〇・九一頁)に、「チョンジャ(ジャ)マ節」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて中鉢良護(一九九七a、二二三―二二五頁)に再録されている。これも基本的に(1)と同じである。

宮城(一九九五、九〇・九一頁)には、「二十人の女神はアシヤギよりシヌグナーに行く。途中、サーシムイサーがチョンジャマ節を謡う。他の人はチュイチュイと囃(つた)を入れる。(中略)シヌグナーに来て、女の神職は円陣になってチョンジャマ節を繰返して踊る。」と述べている。これも、この歌謡をうたう場の説明である。

(4)照屋堅竹・新垣隆一・嘉数正助(一九六〇、四九八頁)に、「ちよんじやま」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城(一九八〇a、四二六頁)に再録されている。この本文は節が若干異同している程度で、これも基本的に(1)と同じである。

(5)上江洲均(一九八六、一一二・一一三頁)に「道うた(トウンジャマー)」が採録されている。この神歌は衰弱が激しく、これだけを見ると意味がとれなくなっている。父や兄への返答も、何のこともよくわからない。

2 我喜屋のテキスト

我喜屋のテキスト 次に、我喜屋の標準的なテキストとして、(1)照

屋・新垣・嘉数（一九六〇、二四三・二四四頁）に採録されている「とんざま」を上げる。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城（一九八〇a、四一一頁）に再録されているので、引用する。

B・Cなどの段落区分は、内容上から筆者が付した。

とんざま（伊平屋島）

B一 ひーや 若うるづみがなてくりば

ひーや 若うるづみ（初夏）になつてくると

ひや ぬじざるし〜

ひヤ 抜き晒し抜き晒し

二 ひーや 若夏がなりばよー

ひーヤ 若夏になると

ひや ひちざるし〜

ひヤ 引き晒し引き晒し

ひや ちよい〜 とんざま

ひヤ チヨイチヨイ トンザマ

三 ひや 一夜あかちまはだをー

ひヤ 一夜明かして真肌苧

ひや 二夜あかちまはだを

ひヤ 二夜明かして真肌苧

ひや ちよい〜 とんざま

ひヤ チヨイチヨイ トンザマ

C四 ひや 山芋ぬ下をて枕するうち

ひヤ 山芋の下で枕するうち

ひや やからち鳥にうくさりて

ひヤ やから千鳥に起こされて

ひや ちよい〜 とんざま

ひヤ チヨイチヨイ トンザマ

五 ひや 山芋ぬ下をてよい〜するうち

ひヤ 山芋の下でよいよいする

うち

ひや やから千鳥にうくさりて

ひヤ やから千鳥に起こされて

ひや ちよい〜 とんざま

ひヤ チヨイチヨイ トンザマ

六 ひや はまづきぬ下をてよい〜するうち

ひヤ 浜づきの下でよいよいするうち

るうち

ひや やから千鳥にうくさりて

ひヤ やから千鳥に起こされて

ひや ちよい〜 とんざま

ひヤ チヨイチヨイ トンザマ

七 ひや うががやぬあちが いちやいいちぬりらば

ひヤ おまえの家の父親が如何

といったら

ひや 白浜ぬ千鳥ぬ 羽だりぬきよらしや

ひヤ 白浜の千鳥の羽垂れの清

らさ

足じけぬきよらしや

足使いの清らさ

ひや うりぬんでいち 朝が潮ん満たち

ひヤ それといって 朝の潮も

満たして

夕が潮ん満たち

夕の潮も満たして

段落構成

A（男主人公の登場）がなく、一〜三がB（芭蕉衣の紡織過程）、四〜七がC（逢い引きの場面）である。これだけで意味が

鮮明にとれるとはいえないが、芭蕉衣の晴れ着を着て浜辺で恋を語らつていとわかるだろう。

なお、中鉢（一九九七b、二二八・二二九頁）は、「やまんむ（山芋）」を「山桃」、「やからち鳥」を「憎い千鳥」、「よひよひする（よいよひする）」を「ゆったりしている」と解している。この方がより正確に意訳されている。

(1)照屋・新垣・嘉数（一九六〇、二四三頁）は、我喜屋の男神人「神官アンナ・イヒナ」が歌った、と記している。これは、この神歌の歌い手の説明である。

その他のテキスト その他、(2)新垣平八・諸見清吉（一九五六、九〇〜九二頁）に、「とんざま」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城（一九八〇a、四二八・四二九頁）に再録されている。これは(1)とほとんど同じである。

また、(3)諸見（一九八一、三三四頁）に、「我喜屋のウムイガキおもしろ」が採録されている。次にこれを引用する。意味段落を示すCと節を示す番号は、筆者が付した。

我喜屋のウムイガキおもしろ

C 一 はまづきの下うて

まくらするうち

やからちどりに うくさりて

二 やまんむの下うて

よいよひするうち

やからちどりに うくさりて

三 ちどりなくといの

羽だてのつらさ

足ぢけのつらさ

四 うがやぬやつくが

うりいちぬれらば

五 あさがじゅんみたち

ゆながじゅんみたち

うりまでかたらな

これは(1)のC（逢い引きの場面）に相当している。

(4)新垣・諸見（一九五六、六七頁）に、「我喜屋村、田名村のトンザマ節」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城（一九八〇a、四二七頁）に再録されているので、引用する。段落区分のBは、内容上から筆者が付した。

我喜屋村、田名村のトンザマ節

一 うむひうむひ 神のうむひ

うまんちゆの仕立たる

赤はんのゆぬし

なかむらち

はたあまち

しまぬのろにうさぎて

ひーや ちよーい ちよーい とんざま

ウムヒウムヒ 神のウムヒ

御真人が仕立てた

赤碗の世直し

中盛らして

端余して

島の祝女に押し上げて

ヒーヤ チョーイ チョーイ

トンザマ（囃子）

二 一 うまんちゆぬ仕立たる

御真人が仕立てた

白はんのんつむふ

白碗のんつむふ

中むらち

中盛らして

はたあまち

端余して

しまぬ掟にうさぎて

島の掟に押し上げて

ひーや ちよーい ちよーい

とんざま

ヒーヤ チョーイ チョーイ

トンザマ

B 二 わかうるじゆみがなくてれば

若うるじゆみ(初夏)になつてくると

ちゆちやあかち まわだを

一夜明かして真肌苧

たちやあかち まはだを

二夜明かして真肌苧

ひーや ちよーい ちよーい

とんざま

ヒーヤ チョーイ チョーイ

トンザマ

四 ひちぎるしぎるし しやさい

引き晒し晒し しやさい

ぬじぎるしぎるし じやるしやひ

抜き晒し晒し じやるしや

ひ

ひーや ちよーい ちよーい

とんざま

ヒーヤ チョーイ チョーイ

トンザマ

この「我喜屋村、田名村のトンザマ節」は、田名と我喜屋に共通するチョンジャマのように記述しているが、実態は我喜屋の二種類の歌

謡を連続して記述している。一・二は我喜屋のサーシムイ(勧酒)で

の勧酒歌で、我喜屋のシヌグで勧酒歌がうたわれていたことを示している。宮城(一九九五、八九・九〇頁)と照屋・新垣・嘉数(一九六〇、二四三頁)にも、これとほとんど同じ「我喜屋のサーシウムイ」・「おもろ」が採録されている。

三・四は、チョンジャマのB(芭蕉衣の紡織叙事)である。

我喜屋と田名のシヌグで、サーシムイの神歌(勧酒歌)とチョンジャマをうたうので、新垣・諸見(一九五六、六七頁)は両村落の四つの歌謡を一括して「我喜屋村、田名村のトンザマ節」としたのだろう。これは誤解を招きやすい記述である。

(4)に引き続き、(5)新垣・諸見(一九五六、六八頁)に、「道歌」が採録されている。このテキストは、共通語訳が付されて外間・玉城(一九八〇a、四二七頁)に再録されているので、引用する。段落区分のCは、内容上から筆者が付した。

道歌(うむいがき)

C 一 はまづきの下うて

浜づきの下で

まくらするうち

枕をするうちに

やからちどりにうくさりて

やから千鳥に起こされて

二 やまんむの下うて

山芋の下で

よひよひするうち

よひよひするうちに

やからちどりにうくさりて

やから千鳥に起こされて

三 ちどりなくとひの

千鳥鳴く鳥の

羽だちのつらさ

羽垂れの美しさ

足ぢけぬつらさ

足使いの美しさ

四 うがやぬやつくが

おまえの家の兄者が

うりいちぬれらば

それといったら

五 あさがじゆんみたち

朝の潮も満たして

ゆながじゆんみたち

夜長潮も満たして

うりまでかたらな

それまで語ろう

この歌謡の全節がチョンジャマのC(逢い引きの場面)で、(3)とほとんど同じである。こうして並べて見ると、直前の(4)「トンザマ節」の三・四(B)とこの(5)「道歌(うむいがき)」(C)が一つの歌謡・チョンジャマだとわかる。用語もまた、今までの我喜屋のチョンジャマと共通している。(4)と(5)のつながりは、よほど注意しないと混乱してしまうところである。

3 両テキストの比較

両テキストの比較 田名のチョンジャマは主人公の紹介(A)をすべて持つており、その名前に異伝がない。これに対して、我喜屋のチョンジャマはすべてAを持つていない。

芭蕉衣の紡織叙事・晴れ着の段(B)は、両村落のチョンジャマが持つている。田名の場合、伝承状況が良好であるのに対して、我喜屋は省略化する傾向にある。我喜屋がAを持たず、Bも省略化の方向にあることは、歌謡の規制力が緩いことを意味している。すなわち、歌の内容(物語性)が不鮮明になり、芭蕉衣の紡織叙事(B)が愛する

男に着せるために女のする愛の行為にも解釈できる。(注)このような歌謡の規制力の弱さは、この歌謡の由来譚の形成にかかわってくるだろう(後述)。

逢い引きの場面(C)はどちらもよく伝承されている。この段落は大いなる関心をもって歌い継がれたと思われる。

(注) チョンジャマのような主題、すなわち芭蕉衣の紡織叙事(B)と逢い引きの場面(C)を述べる歌謡として、伊計島のウシデーク(お盆後の七月一六日に催す)の「伊良部潟原」の三・八が上げられる。このウシデークの伝承者は当山タケ刀自(一九二二年生)で、柄杓取りという神役も務めている。次に引用する本文と共通語訳は、当山刀自から教えてもらったものである。B・Cの段落区分は、内容上から筆者が付した。

伊良部潟原

B三

初夏や

初夏の

二十日芋よ

二十日芋よ

若夏や

若夏の

真肌芋よ

真肌にあう芋よ

(美スラヨ

ハイ美ラヨ

ハイ誇ラサヨ サヨイ)

(囃子詞、下略)

四 引き晒ち晒ち

引いて晒し晒し

五 抜き晒ち晒し

抜いて晒し晒し

吾が肌す 下裳小

私の肌につける下裳は

吾^ワが御衣^{シヌス}す 下裳^{カカミ}小

私の御衣で作る下裳

C六 うちやふたや

ウチャフタ(女の名)は

筵^{ムスルト}取^トて

筵を引いて

やちやふたや

若者は

枕^ト取^トて

枕を取って

七 無蔵^{シノ}とになすたしが

恋人と寝たけれど

里^{サト}と腕^{ウデ}なすたしが

恋人と腕枕したが

八 まふとやや かしまさよ

蚊がかしましい

飛鳥^{トビトヤ}や

鶏^{トリ}が恨めしい

当山刀自によると、この一連の歌謡は若い男女の恋を主題にして

いる。三、四の芭蕉衣の紡織叙事は、女が若者^{ヤチヤク}のために愛情をこめ

て立派に織ったと述べている。ここには女の積極的な恋心が示され

ており、若者^{ヤチヤク}はこの芭蕉衣を嗜れ着(恋の場に着ていく恋衣^{コイコロモ})に

して逢い引きに行く。これに対して、五で女は自分の下裳^{カカミ}を自分で

作っている。下裳^{カカミ}は一人前の女性が着ける嗜れ着なので、これを作

る五の「吾^ワ」は成女になろうとする若い女だとわかる。彼女はこれ

下裳を身につけて逢い引きに行くのである(以上B)。

ウチャフタは女の名前で、彼女が若者^{ヤチヤク}とともに共寝の準備をして

いるのが、六である。ウチャフタ・ウタフタはよく見られる女の名

前であり、ヤチャフタはヤッチーともいつて若者の義だという。こ

うして二人は寝たが、蚊に悩まされ、一番鶏の鳴き声を恨んでいる

(以上C)。

このように、右のウシデークは若い男女の瑞々しい恋を少々コミ

カルに歌って、シマ人に好まれているという。

(引用文献・参照文献)

新垣平八・諸見清吉 一九五六 『伊平屋村誌』

上江洲均 一九八六 『伊平屋島民俗散歩』(ひるぎ社)

大胡欽一 一九九四 「北部沖繩の社会組織に関する覚書(補

遺)―伊平屋村田名の事例分析― 『南島民俗文化の総合

研究』(人間の科学社)

沖繩大百科事典刊行事務局 一九八三 『沖繩大百科事典(上・

中・下)』(沖繩タイムス社)

小野重朗 一九九四 「シヌグ・ウンジヤミ論」 『南島の祭り』

(第一書房)

小野重朗 一九九五 「紡織叙事歌考」 『増補南島の古歌謡』

(第一書房)

宜保栄治郎 一九七五 「ウシデーク エイサー 巻き踊り」

『日本庶民文化史料集成 第十一巻南島芸』(三一書房)

高阪薫 一九八七 『沖繩の祭祀―事例と課題』(三弥井書店)

小林幸男・鳴坂公江・金城厚 一九七六 『沖繩諸島の神歌』

島袋源七 一九二九 『山原の土俗』(郷土研究社) 『日本民俗

誌大系 第1巻』(一九七四)に再録(角川書店)

諸見清吉 一九八一 『伊平屋村史』(伊平屋村史発刊委員会)

照屋堅竹・新垣隆一・嘉数正助 一九三七 『島尻郡誌』(島尻

郡教育部会編) 再版 一九六〇

仲田善明 一九九七 「本部のシニグ」 「備瀬のシニグ」 「沖繩

県文化財調査報告書 第一二七集 沖繩県の祭り・行事」

(沖繩県教育委員会)

中鉢良護 一九九七 a 「伊平屋村田名のウンジャミ・シヌグの

神歌」 『やんばるの祭りと神歌』 (名護市教育委員会)

中鉢良護 一九九七 b 「伊平屋村我喜屋のシヌグの神歌」 『や

んばるの祭りと神歌』 (名護市教育委員会)

中鉢良護 一九九七 c 「国頭村安波のシヌグの神歌」 『やんば

るの祭りと神歌』 (名護市教育委員会)

島山 篤 一九八四 「ウンザミとシヌグー伊平屋島田名の年中

行事」 『伊平屋・伊是名調査報告書』 (沖繩国際大学南

島文化研究所)

比嘉政夫 一九八二 『沖繩民俗学の方法』 (新泉社)

平敷令治 一九七九 「安波のウンジャミ及びシヌグ」 に関する

覚え書 『民俗研究』 第7号 (沖繩国際大学民俗学実

習)

平敷令治 一九八二 「本部町の「シヌグ」に関する覚え書」

『民俗研究』 第10号 (沖繩国際大学民俗学実習)

外間守善 一九七六 『南島文学』 (角川書店)

外間守善 一九九五 『沖繩古語大辞典』 (角川書店)

外間守善・玉城政美 一九八〇 a 『南島歌謡大成Ⅰ沖繩篇上』

(角川書店)

外間守善・大桑重美 一九九〇 『沖繩の祖神アマミク』 (築地

書館)

真栄田義見・三隅治雄・源武雄 一九七二 『沖繩文化史辞典』

(東京堂)

源武雄 一九七〇 「シヌグに就いての覚え書き」 『祭り』 15号

(まつり同好会)

宮城栄昌 一九六七 『国頭村史(別冊)』 (国頭村役場)

宮城栄昌 一九七九 『沖繩ノロの研究』 (吉川弘文堂)

宮城真治 一九九五 『宮城真治民俗調査ノート(増補改訂版)』

(名護市教育委員会)

宮本演彦 一九五二 「沖繩国頭のシヌグ祭」 『民間伝承』 一六一

七 『沖繩文化論叢』 第三卷(一九七二)に再録 (平凡

社)

武藤美也子 一九八七 「伊平屋島の田名のシヌグ」 『沖繩の祭

祀―事例と課題』 (三弥井書店)

本部町史編集委員会 一九九四 『本部町史通史下』 (本部町)

一八九九 『伊平屋嶋テルク口』 (琉球大学付属図書館伊

波文庫蔵)